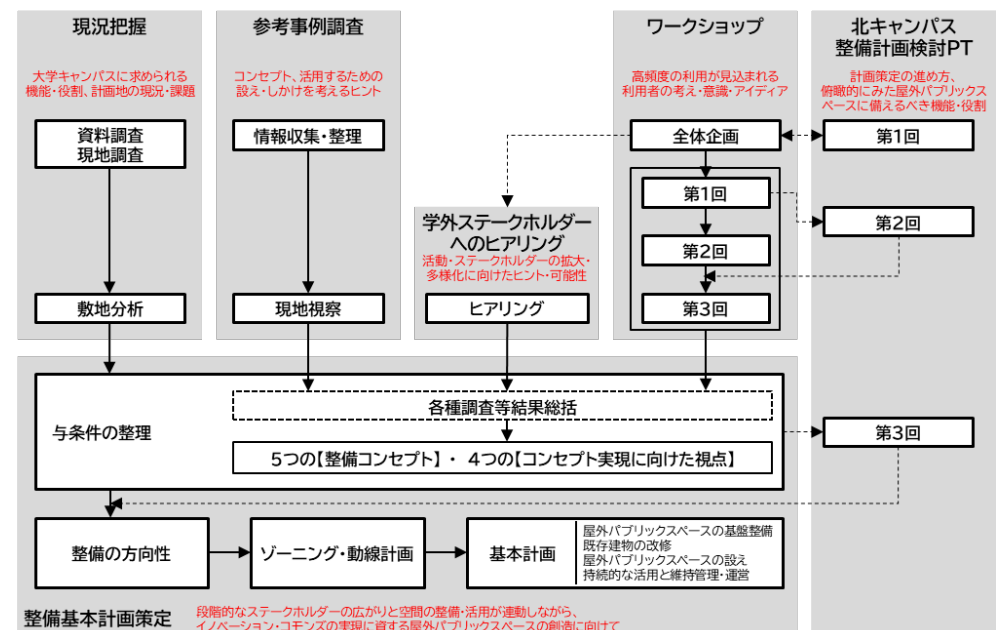


■ 事業の概要

- 教育研究施設群と屋外空間が有機的に連携・機能補完しあうイノベーション・commonsの創出に向け、ステークホルダーによるワークショップ(アイデアソン・ハッカソン)を通じて、北海道大学札幌北キャンパスにおけるソフト・ハードが一体となったパブリックスペース等の整備基本計画を策定するもの。
- ニューノーマル時代において教職員・学生・専門機関等の関係者の新たな居場所・交流の場・ワークスペースとなる屋外パブリックスペースの創出を目指すとともに、屋外空間であることを活かした実証実験の場としての活用も想定し、イノベーション(化学反応)を生み出し続ける屋外パブリックスペース等の新たな存在価値や活用可能性を探る。
- イノベーション・commonsの創出に向けては、創造的思考と先端技術そして客観性を持った「学」の分野、地域社会のニーズを踏まえ民間活力と技術を持った「民」の分野、公共性・公益性を担保する「公」の分野からなるステークホルダーの関わりが必要。
- ステークホルダーの参画については、①学生や研究者、専門機関によるイノベーション・コアを創造するステップ、②新たなステークホルダーの参画によるイノベーションの創造と創発のステップ、③あらゆるステークホルダーが参加するステップ、の3つのステップからなる段階的な取り組みにより、活動の安定を図る。ステークホルダー参画の3つのステップとパブリックスペース等整備が連動し、ソフトとハードが一体となってスパイラルアップしながら、【イノベーションを育てる場】であり【イノベーションで育てる場】となることを想定。

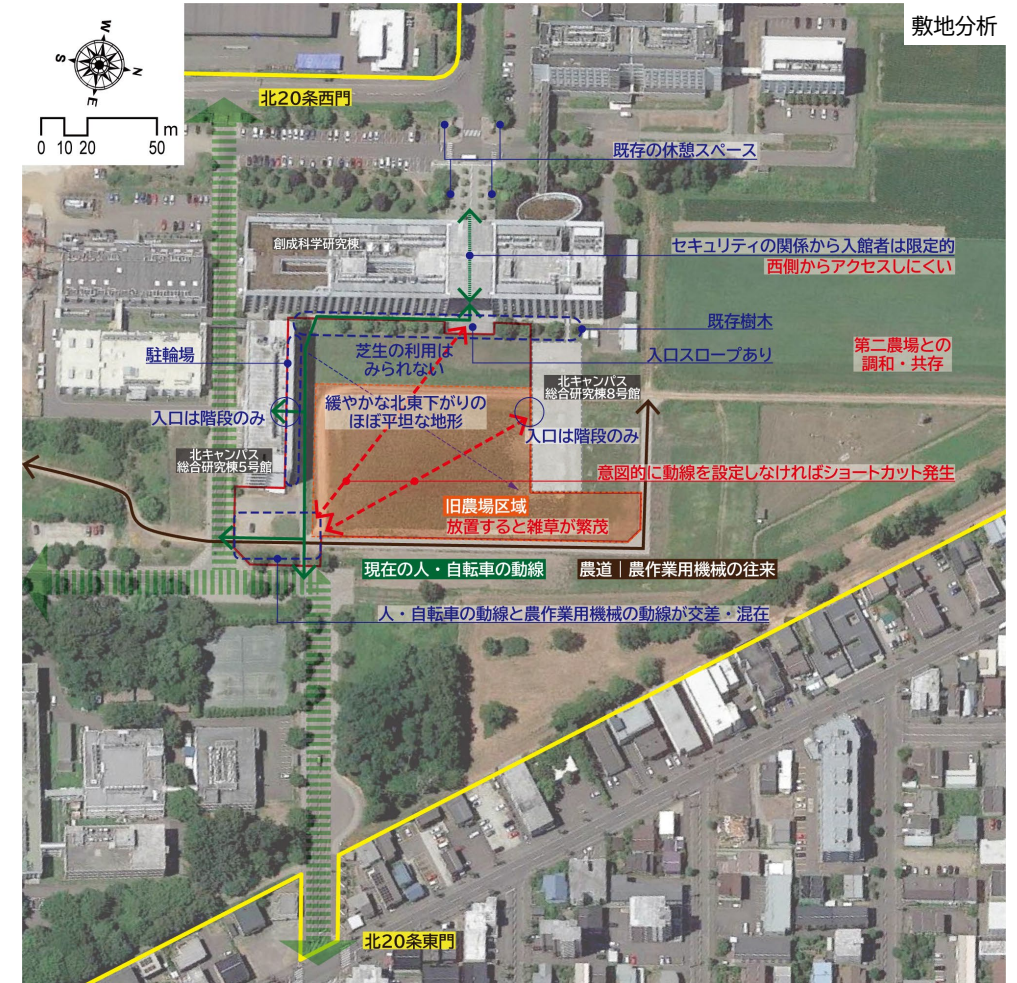


■ 計画地の概要

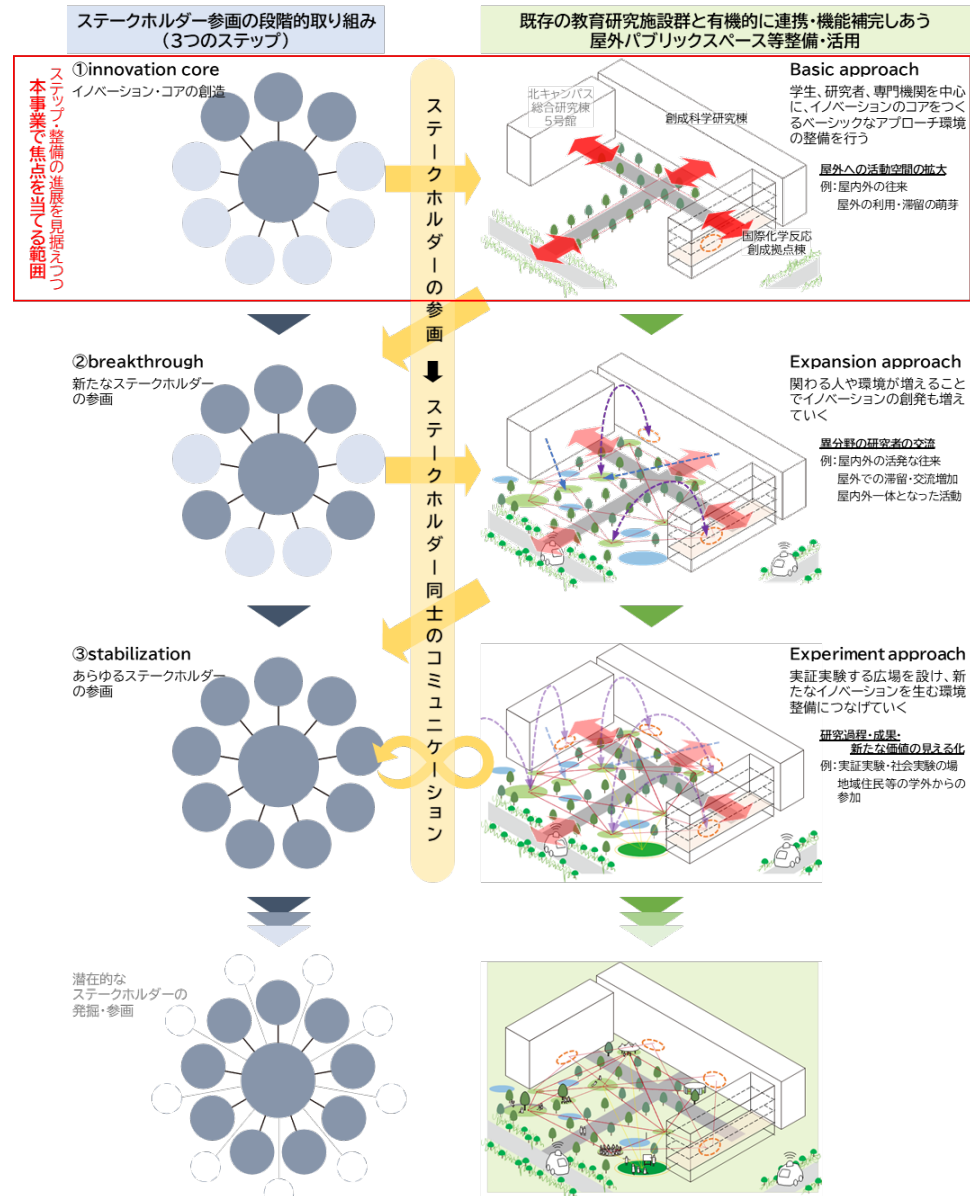
- 計画地は、先端研究を行う研究施設群(サイエンスパーク)としての土地利用を図る地区とされる札幌北キャンパスのほぼ中央に位置、北20条東門から入構すると正面～右前方に視認される。
- 計画地の南・西・北の3面には既に教育研究施設が存在。利用だけでなく、建物から見る対象ともなる。
- 東西・南北それぞれ約100m、約1haの面積を有するコの字状の敷地。
- 北東側を中心に計画地の多くの部分が第二農場の一部として採草・放牧地・畑地として利用されていた。



■ 現況把握・敷地分析



- 計画地周辺には、最先端研究を牽引する電子科学研究所、触媒科学研究所、北極域研究センター、創成研究機構、産学・地域協働推進機構等の研究・産学連携組織が集積している。しかし、学修や研究活動を支援・触発し、活性化させるための利用者が自由に思索・交流できるパブリックスペースは限定され、屋外空間まで広がりをもたせたものではなく、安全かつ円滑な移動を確保する動線(道路)と併せ、屋外空間も含めたパブリックスペースの充実が求められている。
- 計画地の区域の多くを占める旧農場区域は、北キャンパス総合研究棟8号館が整備されたことにより、農場としての利用が行われなくなる。手を入れず放置すれば雑草などが繁茂し、雑然とした景観を呈することが想定される。不特定多数の人がアクセス可能で視認しやすい位置にあることから、本学の各種活動及び周辺住民の生活に対する景観面、防犯面などの影響が懸念され、屋外空間としての整備と維持管理が必要である。
- 新たに建設された北キャンパス総合研究棟8号館入口へ至る動線の設定と併せ、無秩序なショートカット動線の発生を防ぎ、安全性・利便性を満たす動線の確保・明確化が必要である。
- 計画地を囲む教育研究施設3棟のうち、創成科学研究棟エントランスにスロープを併設した大きな開口部が設けられている他は、計画地(屋外)への積極的なアプローチを意図した設えはみられない。創成科学研究棟エントランスにおいても、セキュリティの関係から入館者は限定され、建物西側からのアクセスが良好とはいえない。
- 計画地東側に隣接する農道は第二農場へ至り、農場での作業に利用する農業機械が往来する。第二農場と教育研究施設群との調和・共存を図るため、パブリックスペース利用者の安全面、農場で生産されている作物や飼養している動物の防疫・衛生管理面などを考慮する必要がある。
- 札幌市の指定緊急避難場所であること、本学を含む地域の浸水対策や公共下水道の負荷低減への貢献の面から、地域住民が安心して利用できる避難場所としての整備、調整池機能の整備等による防災・減災機能の強化が必要である。



ステークホルダーの広がり屋外パブリックスペース整備が連動したイノベーション・commons形成のイメージ

■ 現地視察実施概要

目的	札幌北キャンパスにおけるソフト・ハードが一体となった屋外パブリックスペース(PS)等の整備基本計画の策定にあたり、共創活動に効果的な空間の工夫や共創活動の運営体制・手法、各ステークホルダーとの連携体制の構築を検討する上での参考とするため、多様な主体が関わり魅力的なアクション・アクティビティの創出を目指している大学キャンパス屋外PSの整備事例について、整備に至る過程やコンセプトメイキングに着目して調査する「参考事例調査」の一環として、現地視察(ヒアリング・見学)を実施。
視察日程	2022年12月5日(月)~12月7日(水)
視察先	1. 大阪大学 箕面キャンパス(シンボル広場・デッキ広場) 2. 立命館大学 大阪いばらきキャンパス 3. 関西外国語大学 御殿山キャンパス グローバルタウン 4. 龍谷大学 深草キャンパス 5. 大阪公立大学 中百舌鳥キャンパス(ひらめき広場)
視察参加者(敬称略)	北岡 真吾 (北海道大学 サステナビリティ推進機構 SCM本部 特任准教授) 窪田 映子 (株式会社やまち 取締役・副代表) 百瀬 かなえ (株式会社やまち 取締役)
実施項目	PSの整備計画検討や供用後の管理運営の担当者へのヒアリング <ul style="list-style-type: none"> ● 訪問の約1週間前に視察先対応者にヒアリングを希望する内容の概略(下記項目)を伝えた上で、ヒアリング及び整備地の見学を実施 ● ヒアリングの冒頭に、本学で検討を進めている札幌北キャンパス屋外PS整備の概要を説明 <ul style="list-style-type: none"> ■ 施設・空間の利用・活動の状況・課題 利用者層、利用形態、頻度、滞留時間/季節・時間帯・天候等による違い/利用・活動形態の違いによる軌跡 ■ 管理運営の状況・課題(施設・植栽) 管理主体、内容と頻度/大学構成員・利用者・ステークホルダーの関わり・参画/管理運営上の課題 ■ 屋外空間に期待したこと 屋内空間(建物)にはない、屋外空間ならではの役割・機能/屋外へ誘い出す工夫・設え、屋内外をつなぐ工夫・設え ■ 計画・設計意図と供用後の実態、整備後に生じた変化 整備前には見られなかった利用・活動/想定通りでの利用・活動、維持管理レベルとなっているもの/想定していなかった問題・課題、効果・効用 ■ 計画・設計・管理運営体制構築のプロセス・体制 各プロセスにおいて留意・工夫したこと/大学構成員・利用者・ステークホルダーの参画/事業推進にあたって核となる(なった)人・組織・立場など ■ 大学構成員以外の利用(立ち入り)に対する考え方 直接的な利用者(=大学構成員)の考えとの調整・合意形成、教育研究環境保持とのバランス PS整備地の見学 <ul style="list-style-type: none"> ● 視察先対応者の案内・解説の下に実施

	大阪大学 箕面キャンパス	立命館大学 大阪いばらきキャンパス	関西外国語大学 御殿山キャンパス	龍谷大学 深草キャンパス	大阪公立大学 中百舌鳥キャンパス
日時	2022年12月5日(月)12:50~14:30	2022年12月5日(月)15:00~17:15	2022年12月6日(火) 9:00~11:00	2022年12月6日(火)14:30~16:30	2022年12月7日(水)10:00~11:30
対応者(敬称略)	● サステナブルキャンパスオフィス キャンパスデザイン部門	● 財務部管財課 ● 総務部OIC地域連携課 ● (株)竹中工務店	● 庶務部	● 財務部 管理課	● 大学院農学研究科緑地環境科学専攻緑地計画学研究室 ● 事務局企画部施設課
着想を得るヒント	● 開かれたキャンパス ● 学内での分野を越えた検討 ● 空間の使いこなし(想定の活動に合わせたハードの検討)、「屋内外を繋ぐしかけ」 ● 民間事業者等(主に地元)に向けた空間利用(風除室・ピロティ)のサウンディング・公募 ● 周辺のみちづくりとの関係性、エリアマネジメント ● 地域に対する窓口となる事務担当職員の配置 ● 自由度の高い利用・強風時の対応を意識した可動式施設 ● 管理主体の違いによる設えや管理レベルの差異	● 公園との境界を感じさせない開かれたキャンパス ● 公園(屋外PS)に開いた建物 ● Connected Learning Commons、ソーシャルコネクティッド・キャンパス ● 地域との連携を意識した関係づくりの準備段階からの取り組み・継続的な組織運営 ● 場の多様性(居場所の選択肢)と有効活用のための情報提示 ● 環境への気づき・アクションを誘発する設え ● 立ち入りやすい雰囲気や醸す設え ● 国土交通省事業などの活用	● キャンパスを美しく保つための植栽管理に対する大学の姿勢(トップの意向) ● コスト面から今後も管理レベルの維持には議論が必要 ● 屋内から緑を感じられる風景 ● 要求する植栽管理レベルに応える専属の造園業者の配置 ● 芝生広場を中心とする複数ルートの動線が色々な人との出会いを生む、自然に屋外PSが利用される施設・機能配置 ● テーブル・ベンチは、芝生広場内部にはなく、建物周辺に配置 ● 飲食施設(カフェ・カフェテリア)はコロナ禍もあって苦戦	● 大学キャンパスは外に向けて開かれているべき ● 屋外空間ならではの開放的な憩いの場 ● “屋外にも憩いのスペースが必要”との機運・雰囲気の高まり ● “面白みのある”の視点から学生と世代に近い若手職員が新たな利用促進策を検討・実施 ● カフェ樹林は障害者就労継続支援B型事業所の役割、ノーマライゼーションの理念を大学内部から実践・発信する目的 ● 自動芝刈機の活用 ● 人工芝の(再)利用 ● 強風対策	● 地域に開かれた緑の活動拠点を創造する取り組み ● 都市計画(旧市大)・緑地計画(旧府大)専攻学生の合同ワーキンググループ、研究室OBや施工業者の協力で計画~施工まで可能な範囲で学生が関与 ● プロセスデザインの重要性、活動開始前からの声かけ・仕込み・協働 ● 個人での利用と複数での利用の共存 ● 定点観測(利用状況の分析・モニタリングを想定した自動撮影カメラの設置)
備考	● 2021年4月竣工(キャンパス開設) ● 開放	● 2015年3月竣工(4月キャンパス開設) ● 開放	● 2017年12月竣工(翌4月キャンパス開設) ● (原則)関係者以外立入禁止	● 2006年10月キャンパス修景事業竣工、その後も建築物の建替え・解体等あり ● 開門時間中開放	● 2022年3月竣工(ひらめき広場)開放 ● 2022年4月に大阪市立大学・大阪府立大学統合
写真等	 <p>※図1 従来のキャンパス vs オープンスペース 大学 緑のあるキャンパス OIC 1期計画 産官学連携の実現 今回の計画 ソーシャルコネクティッド・キャンパス ヒト・コト・モノをキャンパスに引き込み、オープンイノベーションを実現</p>				

※図1 国土交通省 令和3 年度第2 回サステナブル建築物等先導事業(省CO2 先導型)採択プロジェクト事例紹介「立命館大学OIC 新展開施設整備事業」より

■ ワークショップ開催概要

1回目 プレスト・共創広場について考える

<情報共有>
北キャンパス・パブリックスペース(屋外空間)の整備について
<グループディスカッション>
・ひらめきの瞬間を知る
・研究や物事が進展する時は?
・ひらめきや進展を促す場とは?

2022年10月13日(木)開催
参加者17名

2回目 共創活動に必要な屋外空間の機能は何か

<情報共有>
1回目の振り返り、事例紹介
<グループディスカッション>
・テーマに沿ってイノベーションcommonsを考える
【イノベーションをうむには】
【北キャンパスの顔となる空間とは】
【利便性を高めるには】
【交流・コミュニティをうむには】
【リフレッシュ・休む場となるためには】
【外の人を呼び込むには】

2022年10月25日(火)開催
参加者17名

3回目 共創活動のための屋外空間について

<情報共有>
これまでの振り返り、プランのまとめについて
<グループディスカッション>
・プランをまとめる
・季節ごとの活用イメージを考える
~春夏秋冬の1日を想定して活用のイメージを考える

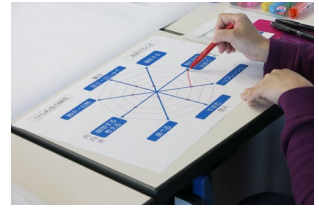
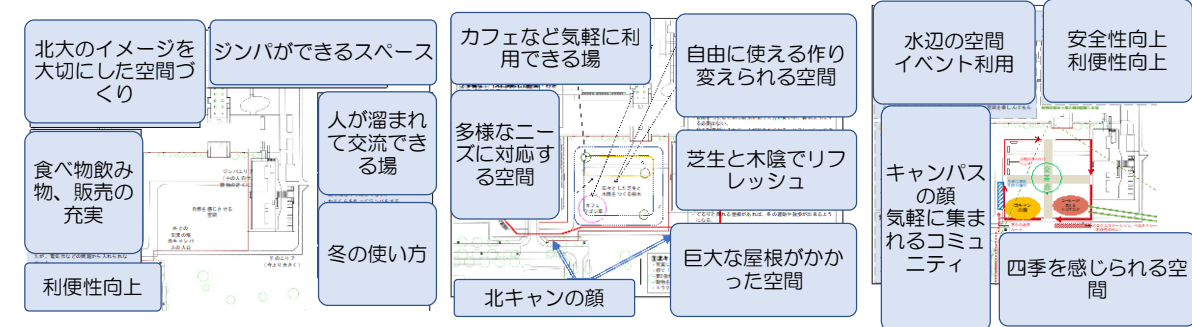
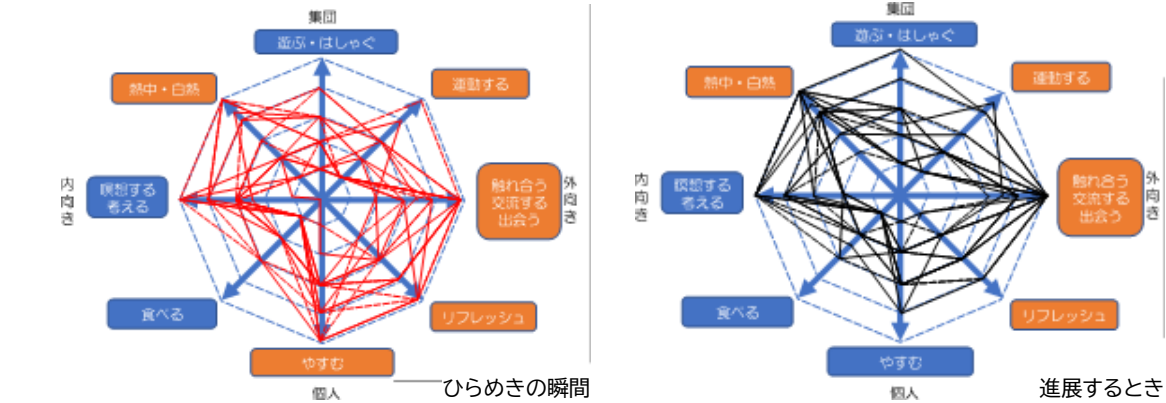
2022年11月10日(木)開催
参加者16名



- 屋外パブリックスペースの空間のあり方や活用について考えるワークショップを3回開催。
- 札幌北キャンパス関係者を中心にワークショップ参加希望者を募集、下記所属の教職員・学生が参加し、各回3グループに分かれて意見交換。
 - ・ ICreDD
 - ・ 電子科学研究所
 - ・ 先端生命科学研究所
 - ・ 触媒化学研究所
 - ・ 創成研究機構
 - ・ URAステーション
 - ・ 北方生物圏フィールド科学センター 生物生産研究農場
 - ・ 北キャンパス合同事務部
 - ・ 研究支援課
 - ・ 北海道大学生協同組合
 - ・ SCM本部
- 各回ともファシリテーター4名(外部コンサルタント)・事務局2名(SCM本部教員・事務補佐員)で運営。

■ 第1回ワークショップ

- レーダーチャートを利用しながら「自分がひらめく瞬間はどのような時か」、「ひらめきや考えが進展するときどのような時か」をワークショップ参加者各自に考えてもらう時間を設け、その要因をグループ内でお互い紹介しあうことでイノベーションを創発する「場」を考えるきっかけとし、ひらめきの瞬間・進展するときを支えるパブリックスペースはどのような空間であつたらよいかについて意見交換。



■ 第2回ワークショップ

- 第1回ワークショップの意見を集約整理した以下の6つのキーワードに沿って、具体的なイノベーション・commonsの「場」や「空間」のイメージについて意見交換。

- ◆ イノベーションをうむには
- ◆ 北キャンの顔となる空間とは
- ◆ 利便性を高めるには
- ◆ 交流・コミュニティをうむには
- ◆ リフレッシュ・休む場となるためには
- ◆ 外の人を呼び込むには



Aグループ

- キャンパスの人間同士の交流
- 自然エネルギーの実験
- 仮設のセッションスペース
- 四季を感じる風景・草原のような風景
- エントランスのシンボルツリー
- 季節を彩る植栽
- 建物などを置かない雪原
- 移動の利便性を高める・セグウェイ
- 飲食が買える場
- 交流できるベンチなど休憩スペース
- 屋根付き広場
- 屋外ワークスペース
- ジンパ・BBQ
- 軽いスポーツの出来る広場と屋根
- 基本オープンな空間
- 雑草は羊に食べてもらう
- 駐輪場

Bグループ

- 研究者同士が知り合える場
- 交流できる場、ジンパのできる場
- 屋根があり、下が自由に使える
- 自由に使えると交流が生まれる
- 先端研究が行われていることが表出し、それらが強じり合える空間
- 広場の中央に集まって発表しその周囲にマーケット
- 屋外で卒論発表やポスターセッション
- 周囲の建物のスクリーン化
- 自然の多い空間
- 飲食物買える場
- 利便性を高める実験の場
- 歩行環境向上、ポロクル設置
- 自由度が高く人がつながる空間
- 自由に過ごせる空間
- 軽い運動のできる空間
- 季節や時間ごとで使い分けられる空間
- 歩く、集う、座る等シンプルに過ごせる場
- 3棟共同で利用できる特色が溢れる場
- 舗装へのドネーション
- 芝と舗装でゾーニングデザイン
- キッチンカーが入場できる
- 入口同士をつなぐ放射状の道
- 交通の利便性、外灯の設置
- 化学反応創成研究拠点としてレセプションや講義できる場
- 中央に屋根付き交流スペース
- 屋根やイステーブルは取り外し、移動ができる
- デザインの良い空間
- 体を動かせる空間
- 日陰や羊などの癒しを感じられる空間

Cグループ

- 日常生活・研究生活を快適で豊かにする空間
- 屋内外から望むことのできる癒しの風景
- アカデミックな活動を創出する空間
- 研究者同士がつながることのできる空間
- 交流・憩い・軽い運動など多様なアクティビティを受け止める空間
- 多様なアクティビティを支える設え
- 土地の記憶の継承
- 環境への配慮や実験の場など先進的な取組を試すことのできる場

■ 第3回ワークショップ

- イノベーション・commonsの活用方法をより具体的に検討できるように、四季(春・夏・秋・冬)及び時間ごとの活用イメージについて意見交換。



①「春」の活用イメージ

- 虫や黄砂などの課題
- 排水、排雪の必要性
- 学校祭の時の人の出入り
- 雪解け時の利用制限
- 照明の設置
- ジンパや花見、歓迎会での利用
- メンテナンスのかからない植物の植栽
- ランチ時の利用
- 日中も外に出られる工夫
- 一般公開時の利用
- サクラの植樹
- 春を楽しむ工夫

②「夏」の活用イメージ

- 休憩施設や日陰の必要性
- 火気の使用、ジンパのできる空間
- 運動、運動会のできる空間
- 学食が出来る空間
- ピアガーデンの開催
- カフェの営業時間
- ランチ、買い物ができるカフェサロン
- 虫が寄ってこない樹種の選定
- サマースクールの懇親の場
- 子どもの利用
- 夕方(アフターファイブ)の活用イメージ
- 自由にパーソナルな利用イメージ
- 最小限な道の設定
- セミナーなどでの利用
- パラソルやWi-Fiなどの設置

③「秋」の活用イメージ

- 仮設設備の利用のしやすさ
- カフェサロンの利用イメージ
- 紅葉する樹木の植樹と樹木のライトアップ
- カフェで農作物の販売
- 秋の歓迎会
- 学会のレセプションでの利用
- 癒しのある景観
- スポーツで交流
- マルシェの開催

④「冬」の活用イメージ

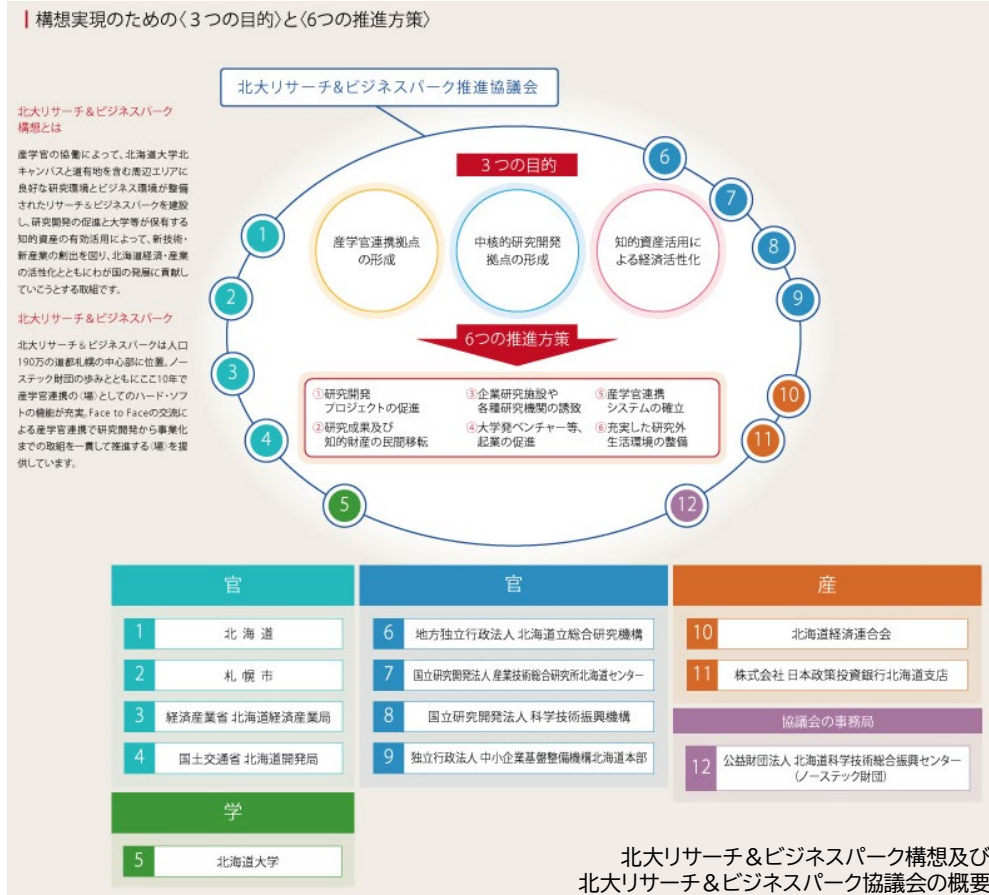
- 除雪の必要性
- 冬期のカフェサロン営業
- 積雪のきれいな景色
- 実験の場
- 雪合戦や遊びの空間
- カフェサロンの利用イメージ
- カフェサロンの仕様、設備
- 舗装の歩きやすさ
- 癒しのある風景
- 外灯の設置
- 舗装の歩きやすさ

■ 学外ステークホルダー(ノーステック財団)へのヒアリング

- 今後のステークホルダー参画の広がり・多様化を意識し、計画地近隣に立地する公益財団法人北海道科学技術総合振興センター(ノーステック財団)へのヒアリングを実施。

実施日時	2023年1月31日(火) 10:00~11:40
実施場所	北海道産学官協働センター(ノーステック財団※)1階ミーティングルーム ※ノーステック財団(NOASTEC):公益財団法人北海道科学技術総合振興センターの略称
対象者	ノーステック財団 北大リサーチ&ビジネスパーク推進協議会
実施者(敬称略)	北岡 真吾 (北海道大学 サステナビリティ推進機構 SCM本部 特任准教授) 森本 智博 (北海道大学 施設部 施設企画課 課長補佐) 神長 敬 (株式会社やまち 代表) 百瀬 かなえ (株式会社やまち 取締役)
ヒアリング内容	<ul style="list-style-type: none"> ■ 現状・背景 <ul style="list-style-type: none"> ・ノーステック財団の役割、スタッフの一日の動き ・北大(教員、事務職員等)とどのくらい交流があるのか ■ 北キャンパスのパブリックスペース(PS)に求めるもの <ul style="list-style-type: none"> ・北キャンパスに足りないもの ・QOL(Quality Of Life)を向上させる場として、どのような「機能」があるとよいか ・個人として、屋外PSに対しニーズがあるのか、どのような機能・施設があれば利用するか ・PSがあると、何ができるようになるか? ・組織として、屋外PSに対しニーズがあるのか、どのような機能・施設があれば利用するか ・PSをどのように使うことが理想か ・北キャンパスが地域に開くことは重要か、また「誰」に開くとよいか ■ パブリックスペース完成後の利活用について <ul style="list-style-type: none"> ・完成後の屋外PSを運営するにあたり、個人として、または組織として、どのような企画があるとよいか ・パブリックスペースを利用し、一緒に考えたり、試したり出来るような主体は ・完成後のパブリックスペースにおいて試したい技術等はあるか ■ その他 <ul style="list-style-type: none"> ・北キャンパスに「交流空間」「新たな価値を生み出す」には、どのような空間が必要か

- 大学が実施している最先端研究を見せるショールーム・ショーケース、農場と近接していることを活かした「農」を通じての市民との接点、パブリックスペースの活用・管理運営への「北大リサーチ&ビジネスパーク協議会」の関与の可能性などの意見・アイデアを聴取。



■ 各種調査結果等の総括

- 基本計画において、抽出されたニーズ、課題、課題解決のアイデアを空間のデザイン・活用・管理運営等の項目に反映させるため、現況把握(敷地分析)、ワークショップ、ノーステック財団ヒアリング、参考事例調査における現地視察、北キャンパス整備計画検討PT会議の内容を総括。

【コンセプト】

- 自由な思索・リフレッシュによりひらめきを生む憩いと交流の場の創造
- イノベーションを生む産学地域交流の場となるパブリックスペースの創造
- 先端技術発信のショールームとなるような多様な活用
- 研究機関等の集積と総合大学が持つ知的財産を活かした実証実験のフィールド化
- グリーンインフラとしての多機能性を発揮するオープンスペースの創造

【屋外パブリックスペースの基盤整備】

- 各施設をつなぐ動線の改善
- 周辺動線の快適性向上
- 施設間をつなぐ快適な動線の確保
- 冬期間の歩行の安全性向上
- 段差、傾斜路の少ない仕様とする
- 防災・減災への対応
- 非常用電源の確保
- 一時避難者の滞留スペース確保
- 防災備蓄、仮設什器の保管
- ガス、上水の確保
- 雨水貯留浸透施設やレインガーデン設置の検討
- 駐輪場の整備

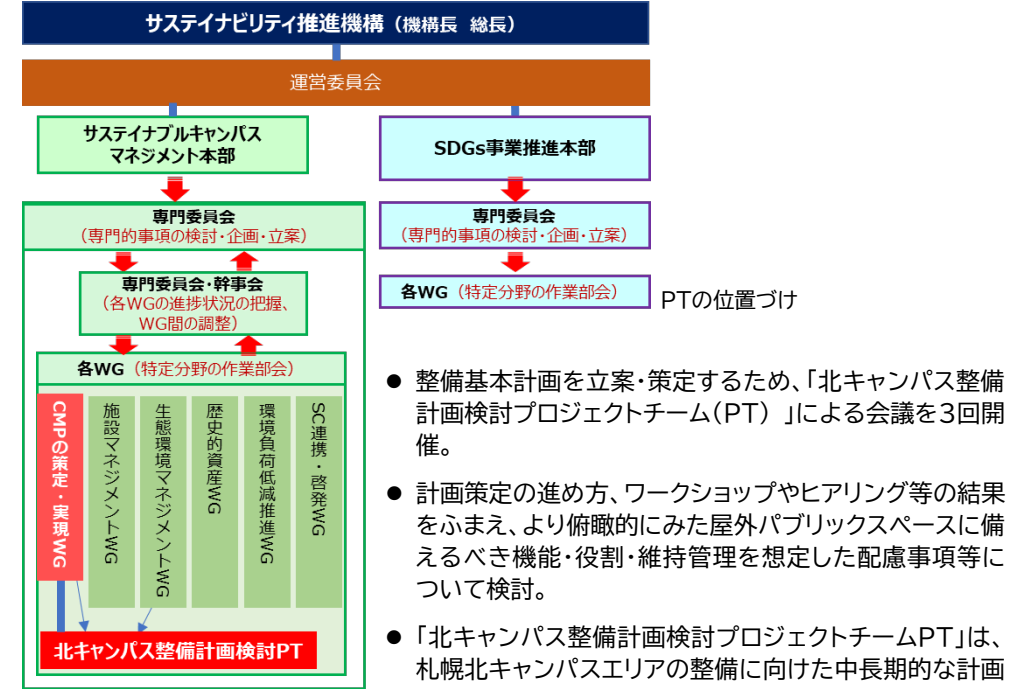
●外灯の設置

- 夜間の安全性確保
- まぶしさ等建物(室内)に影響しない配慮
- 維持管理施設の整備
- 作業に必要な搬入路、重機導線の確保
- 電源(コンセント)の設置

【屋外パブリックスペースの設え】

- 交流・憩い・軽い運動など多様なアクティビティを受け止める空間
- ランチやリフレッシュ、休むことの出来る場(木陰のベンチ等)
- キャッチボールなど軽い運動が出来るスペース(芝生広場等)
- 心地よく打合せやPC作業のできるスペース
- 窓から望むことの出来る癒しの風景(樹木や草花、子どもたちが遊ぶ風景等)
- 季節や時間ごとで使い分けられる空間
- 歩く、集う、座る等シナプスに過せる場
- 自由に過ごせる空間
- 屋内外から望むことのできる癒しの風景
- 四季を感じる風景・草原のような風景
- 季節を彩る植栽
- 建物などを置かない雪原

■ 北キャンパス整備計画検討プロジェクトチーム



- 整備基本計画を立案・策定するため、「北キャンパス整備計画検討プロジェクトチーム(PT)」による会議を3回開催。
- 計画策定の進め方、ワークショップやヒアリング等の結果をふまえ、より俯瞰的にみた屋外パブリックスペースに備えるべき機能・役割・維持管理を想定した配慮事項等について検討。
- 「北キャンパス整備計画検討プロジェクトチームPT」は、札幌北キャンパスエリアの整備に向けた中長期的な計画を立案するとともに、その実現に向けた各整備プロジェクトの優先順位の決定や具体的な基本計画等のアクションプランの策定を目的として設置されたもの。
- 大学キャンパスの空間整備・マネジメントに関する専門知識・技術を有する本学教職員により構成(教員7名・施設部職員5名)。

【既存建物の改修】

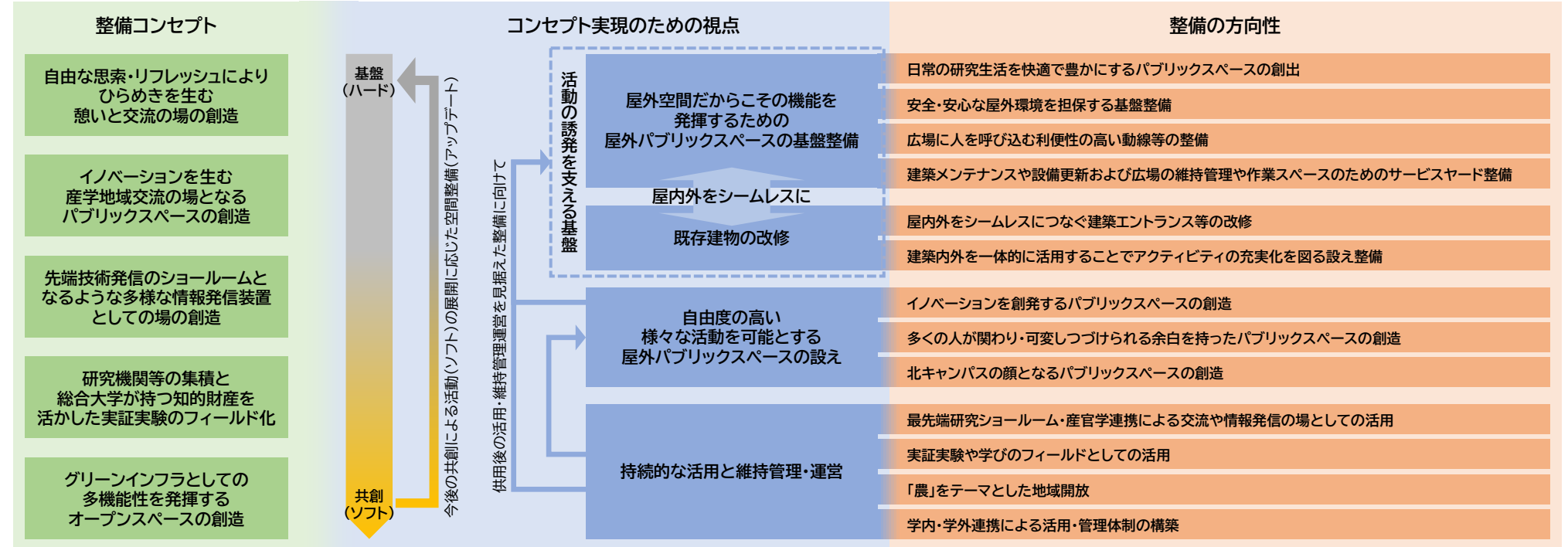
- 周辺からのアクセス改善
- 創成科学研究棟のエントランス空間のオープン化
- エントランス空間とパブリックスペースとの往來の自由度を高める
- 広場に面する建物エントランスのバリアフリー化
- 建築内外の一体性向上によるパブリックスペースの活用促進およびアクティビティの充実
- 建築壁面のスクリーン化による広場との一体的な活用
- 5号館の図書館機能の積み出しを期待する図書館前デッキの整備

【活用と維持管理運営】

- 最先端研究のショールーム化
- エネルギーや蓄電池、水素など最先端の研究を行っていることを見せる
- 実証実験や学びのフィールドとしての活用
- 環境への配慮や実験の場など先進的な取組を試すことのできる場(自然エネルギーの実験、利便性を高める実験の)
- 広場の維持管理コスト削減に向けた実証実験(自動芝刈り・ロボット草刈機の導入、羊放牧により雑草を食べてもらう)
- 産学官連携による交流や情報発信の場としての活用
- 産学官連携のイベントの実施
- 会議や講演などの後に、屋外空間で立食パーティ
- 「農」をテーマとした地域開放
- 屋外空間を農地として貸し出すことや、収穫体験
- 研究者同士や関係者の交流の場としての活用
- キッチンカーの導入
- 民間投資の仕組みづくり
- 整備のための資金調達
- 舗装へのドネーション
- 利便性の向上(広場・建物内および周辺での今後の検討事項)
- 食堂、売店機能の強化
- 郵便ポストなど事務的な機能の強化
- 交通の利便性の確保

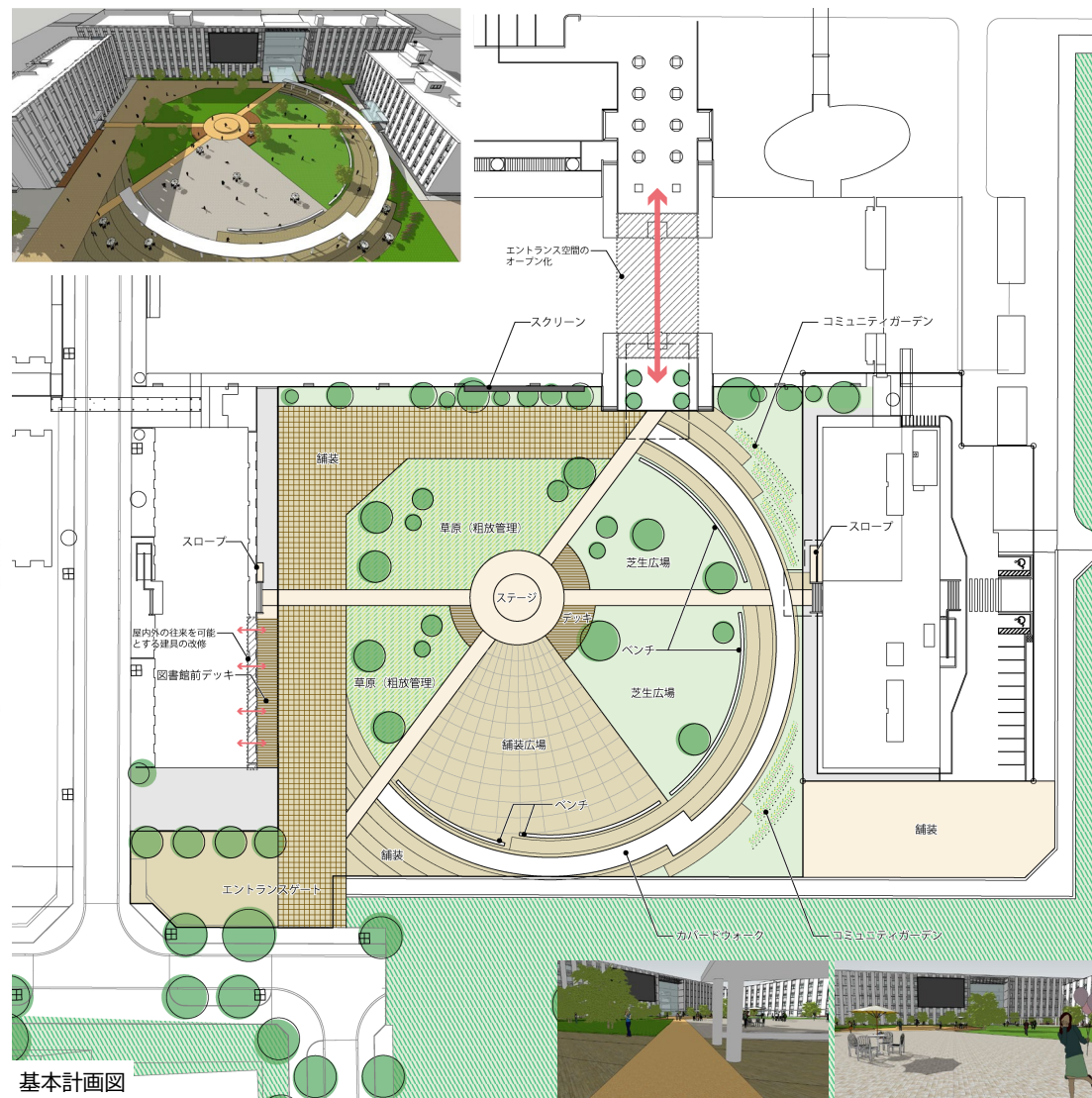
■ 整備コンセプト/コンセプト実現のための視点/整備の方向性

- 現況把握(敷地分析)、ワークショップ、ノーステック財団ヒアリング、参考事例調査における現地視察、北キャンパス整備計画検討PT会議の内容を総括、【イノベーションを育てる場/イノベーションで育てる場】としていくための計画の与条件として、5つの【整備コンセプト】、4つの【コンセプトを実現するための視点】に整理。
- コンセプトを実現するための4つの視点は、既存の教育研究施設に3面を囲まれた敷地に屋外パブリックスペースを整備し活用し続けるという大前提と各種調査等の結果の総括に基づき、活動の誘発を支える【屋外パブリックスペースの基盤】と【屋内外をシームレスに使うために改修された既存建物】という基盤の上に、活動を誘発させつつ将来的な展開を見据えた【屋外パブリックスペースの設え】を配置し、【持続的な活用と維持管理運営】を展開しながら基盤や設えのアップデートを重ねる、という一連の流れ・サイクルから導き出したもの。
- コンセプトの実現のためには、一度に基盤(ハード)を作り上げるのではなく、共創による活動(ソフト)の展開と関連性を持たせ、可変性を受容しながら、段階的・継続的に進めていくことが必要。



■ 整備基本計画

- 整備コンセプト・コンセプト実現のための視点・整備の方向性を受けて、ゾーニング・動線計画を検討の上、基本計画を策定、整備計画図・整備イメージを作成。



■ ステークホルダーの拡大・多様化に向けた今後の展望

- 供用初期段階では、本学構成員の他、先端研究を牽引する研究・産学連携組織が集積する札幌北キャンパスの特性をふまえ、地区を利用する教職員、学生、研究者及び北大R&BP関係者の他、スタートアップ企業、インキュベーション施設利用者、共同研究を実施している民間企業等の研究開発を担う主体を主たる利用主体と想定。
- 本学構内への出入りは自由であるため、市民・住民・観光客など不特定多数の利用を排除することは不可能である一方、札幌北キャンパス関係者の受け止め方は「不特定多数の人を積極的に呼び込む必要はない」との認識が主。市民・住民・観光客といった研究との直接的な関係の浅い主体の利用は今後の検討課題。小規模でも実現可能な空間の活用を段階的に「やって、見せる」と併せて、学内外のステークホルダーとの議論を継続し、この場に相応しいステークホルダーとの関係性を模索。
- 大学キャンパスに対する社会の要請や本学の社会連携に関する基本方針、教育研究環境の保持やセキュリティの観点などから、札幌キャンパス全体におけるキャンパスの開き方のあるべき姿や構内の各パブリックスペースの立地特性に応じた機能・役割・効果を再認識し、位置づけの見直し・明確化を進め、キャンパス全体がイノベーション・commonsとして活性化する手立てを検討。

